New Books

from EDITOR

編集者・作家・訳者による新刊情報

『子どもたちの戦争』

マリア・オーセイミ／著　落合恵子／訳

（講談社／刊　B5変型判　160頁　2200円+税）

レバノンを初めとした4つの地域紛争を4章で形づくり、第5章は少年犯罪の多発するワシントンDCを取りあげています。いずれも戦火の最大の被害者である子どもたちの「痛ましい肉声と、姿」を丹念に集めています。

モザンビークの少女ライザは、「十歳で何度もレイプされ、奴隷にされたわ」と屈辱の様を語り、レバノンのアルバート少年は、「ぼくは戦争が好きだった」とまで言ってのけます。

ワシントンDCの子どもが麻薬の売人と化し、少年ギャング団を形成し、抗争に明け暮れる様は、〈終わりのない戦争〉といえます。

落合恵子さんの「あとがきにかえて」は、「第6章」と章立てたいほど、力が入っており、行き場のない〈日本の子どもの惨状〉を表現していて、胸に迫ってきます。

カバーの装丁は絵本をイメージしており、中を開けばハードなモノクロという、ちょっとした落差が新鮮に感じられます。

この写真集は、後を引きます。

（講談社・阿部薫）

『目不酔草子』

河野貴代美／著

（ミネルヴァ書房／刊　46判　244頁　1800円+税）

フェミニストカウンセラーの草分けとして知られる著者初の書下しエッセイ集。

カウンセラーってどんな人で、どんなことを考えているのか、悩みなんてあるのでしょうか。ふだんはカウンセリングルームを訪れる女性たちの悩みにつきあっている河野先生が、自分自身の心のなかをのぞくようにして語る、仕事、家族、こころ、人生、愛。

そこに描かれているのは、泣いたり、笑ったり、悩みながらもそこから立ち上がり前を向いて歩きだす勇気ある女の子であり、運命を自分で切り拓いていく力をもちながら、時にはなにかを失う覚悟もある潔い女性、そして、多くの人を愛し、多くの人たちから愛されている豊かな女性です。

誰かに励ましてもらいたい時、誰かに慰めてもらいたい時、そして誰かに傍にいてもらいたい時に、この本を開けばきっとあなたを満たしてくれるものがあるはずです。（ミネルヴァ書房・安岡亜紀）

『ワードマップ　フェミニズム』

江原由美子・金井淑子／編

（新曜社／刊　46判　384頁　2600円+税）

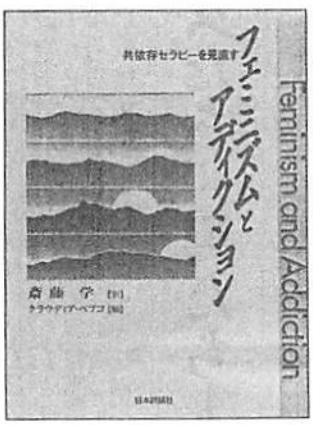
二〇世紀を振り返るとき、「なぜ女は差別されるのか」「女の解放とは何か」を不断に問い続けてきた女たちの思想＝フェミニズムは、現在もなお圧倒的な衝撃力を放っています。「今世紀最大の知の革命の担い手」となったフェミニズムの視座と軌跡を、この本では十五の切り口から、論理の記述に力点をおいて幅広く案内します。「△△フェミニズム」として語られるラディカル、リベラル、マルクス主義、ポストモダン、エコロジカル、ポスト・マルクス主義の諸潮流に加え、レズビアン、反レイシズムなどの運動との接点、フェミニズムによる文学・精神分析・宗教・科学批判、日本フェミニズム論争史（明治から現代まで）をとりあげ、多様なフェミニズムがそれぞれ「何を主張しようとしてきたのか」を丁寧にたどるように努めました。フェミニズムの「イズム」の硬さがどうも、という向きには、フェミニズムのインパクトと出発点を語った江原由美子さん、伊田久美子さんの論考がおすすめです。

（新曜社・小田亜佐子）

『フェミニズムとアディクション』

クラウディア・ベブコ／著　斎藤学／訳

（日本評論社／刊　A5判　290頁　3000円+税）



芥川賞作家の柳美里さんが自認したり、中を開けばハードなモノクロという、ちょっとした落差が新鮮に感じられます。

この写真集は、後を引きます。

（講談社・阿部薫）

で、アダルト・チルドレンとか、共依存という言葉を耳にしたことがあるでしょう。また、この考え方にもとづいて、日本で治療活動を精力的に展開しているのが、本書の訳者である斎藤学氏とそのグループであることをご存知の方も多いでしょう。

さて、この考え方は、一九八〇年代、アルコールやドラッグなどのアディクション（嗜癖）や、児童虐待、家庭内暴力などの家族セラピーから誕生し、大衆から圧倒的支持を受けたのです。しかし他方で、批判にもさらされました。最も鋭い批判はフェミニストからのものでした。それはジェンダーによる「支配」という観点が弱いということでした。

本書は、女性の家族セラピストたちが、この批判を受けとめ、自らのセラピーを、事例によって再点検し、「リ・ストーリング」（再物語）という枠組みを核として再構築に挑むものです。ヒエラルキー的治療構造の超克という熱意が行間から溢れ出るパワフルな本です。

（日本評論社・林克行）

『もうひとりの私をゆるしてあげよう』

金盛浦子／著

（KKベストセラーズ／刊　B6判　216頁　1100円+税）

ACC（アダルトチルドレン）とは、子どもの頃に、肉体的あるいは精神的虐待をうけ、トラウマを抱えたまま大人になった人のこと。なんの不自由もなく健全な家庭に育ったかのように見える人が、実は精神的な抑圧を受けたり、傷つけられたりして、大人になった人も含まれる。